

新潟医療福祉大学の開学にあたって

新潟医療福祉大学学長 高橋 榮明

新潟医療福祉大学は平成13年（2001年）4月に開学した。ここにその開学にいたるまでの経緯、どのような人材育成を目指しているか、どのような役割を地域において、そして国際的に果たすか、開学にあたっての本学の理念をここに述べたい。

I. 開学に至る背景

わが国は現在世界一の長寿国となり、そしてさらに超長寿国へと確実に歩み続けている。この間に、保健医療福祉分野の諸制度は社会構造の激変に対応しきれず、多数の問題点が生ずるにいたった。そのために、これらの諸制度は各分野が協調して機能するように変革されてきたが、一方その分野に従事する専門職の高度化の必要性とその数の不足が指摘されてきた。このような背景から、この分野での専門職の育成を大学や大学院教育で行うことが社会的に要請されてきた。新潟県においても、4年制大学の設置の要望は過去10年来強く進められてきたが、4年前からこの新潟医療福祉大学の設置の準備がなされてきた。

国民の主な死亡原因は20世紀の初頭においてはその当時蔓延していた結核などの感染症であったが、抗生物質の発見により、次第にそれはガンなどの悪性腫瘍や高血圧に変わり、さらに退行変性や生活習慣病が非常に社会的な問題になってきた。そして、「生命の長さ」を伸ばすということが最も重要なこととされてきたが、過去20年来それと同時に、「生命の質」あるいは生活の質(Quality of Life、QOL)を高くすることが重要であるという日本人の健康観、すなわち考え方の枠組み(paradigm

shift)の変化が起こってきた。そして、このQOLの向上・維持を目指した考え方が、医療福祉従事者の充実と多数のマンパワーを必要としてきた。そして、これらのスタッフの支援サービスを必要とする者の全体像をとらえた全人的医療福祉を実現するために、知識技術のみならず、優しさや高い倫理観を兼ね備えた人材の育成を行うことが要請されてきた。そして理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士、社会福祉士を育成する新潟医療福祉大学が、新潟県および新潟市の支援及び地域における民間の諸団体・会社の支援によって公私協力方式で設立された。

II. 開学の理念

このようにして、本学は平成13年（2001年）4月に新潟市島見町に開学することとなった。そして次の3つのことを開学にあたっての基本的な理念とした。

1. 本学は患者、高齢者、障害者、対象者などの生活の質(Quality of Life)を豊かにすることを支援する人材を育成する。

本学は医療福祉保健分野の高度専門職を育成する。その専門職はそれらの専門領域を横断的に、融合的に深く理解し、対象者を全人的に支援する人材である。すなわち対象者の生活の質(Quality of Life)とは何かを自ら考え、その向上の支援を実践する人材であり、いわば「QOLサポーター」とも呼ぶことができ、明るく、熱く、そして行動力のある人材育成を目標とする。

2. 本学は地域社会の医療福祉保健分野のニーズに細やかに応える。

このことは大学が単なる教育機関として、研究情報を公開、提供するのみならず、地域の関連専門職諸団体と連携し、その生涯学習センターとして、地域の第一線で活躍している諸団体の専門職を積極的に支援することである。情報通信ネットワークによる医療福祉施設、在宅介護支援機関などへ支援、さらに公開講座を開催し、一般市民に対して医療福祉保健分野における啓蒙活動のみならず、行政などの諸機関と連携して地域の保健福祉活動に寄与することを目指す。また教職員・学生のボランティア活動を積極的に推進し、地域に密着した社会貢献を行う。

3. 本学は国際社会の医療福祉保健分野の向上に積極的に貢献する。

これは人的交流、すなわち教員、学生の交流のみならず東アジアあるいは世界における医療福祉保健分野での積極的な情報交換を行う。特に本学からこの分野の情報を発信するということである。すなわち明治、大正、昭和時代において医学そして福祉分野でも欧米先進国に留学し、知識を吸収してわが国でその知識を発展させることが主であった。しかし、平成時代の今日、医療福祉分野でも発信型の国際交流が望まれている。

特に日本海に面した新潟において、環日本海圏の拠点を思考する新潟に位置する大学として、また今日わが国が周辺諸国から期待されている役割を果たす意味からしても、この交流は非常に重要である。20世紀初頭の感染症などが問題であった時代の経験から、21世紀において先行するモデルがない少子超高齢社会となる我が国の経験までを積極的に発信し、それがたとえ成功した結果でも、あるいは予想しなかった結果でも、その情報を発信することによって、わが国の各時代と同様な問題を抱える国際社

会の解決の糸口にと考える。

Ⅲ. 教育内容の特色

少子高齢化した地域社会においては保健医療福祉サービスを統合して障害者、高齢者などの自立を支援することが重要である。本学においては、深い人間関係を理解し、高い倫理観に立脚し、個別援助、集団援助から地域計画までを総合し、もって地域社会の要請に応えうる医療福祉分野の高度な専門性を有して、それを実践する人材の養成を目的とする。その目的の達成ためにそれぞれの学科におけるカリキュラムはその名称が示す内容の国家資格の受験資格を取得できるように設定している。そして、本学が目標とする人材育成のために、以下の教育目標を設定した。

1. 患者、高齢者、障害者、対象者のQOL（生活の質、生きる質、健康の質）が何かを自ら考え、その向上を支援する人材を育成する。
2. 高い倫理観を持ち、優しい人間関係が構築できる人材を育成する。
3. 多様な価値観に寛容であり、楽しい対話が出来る人材を育成する。
4. 医療福祉保健分野の多様な専門職の人たちとチームアプローチが出来る人材を育成する。
5. 豊かな教養の基盤上に立ち、深い専門的知識および技能を身につけた人材を育成する。

現代の一般社会において、倫理、哲学、歴史、法律、経済、文学などの広い教養をもち、情報化に対応でき、異文化理解、コミュニケーションの手段として外国語を使い、自ら発信できる人材を育成する。

Ⅳ. 教育課程の編成

1. カリキュラム編成

本学では、質の高い医療福祉専門職の養成を目指して、高度の専門教育を行うと同時に、幅広い教養を身につけ、保健医療福祉に関する多角的な視野を持ち、異なる専門職種間の相互理解を深める教育を行うために、以下のカリキュラムを編成した。

1) 基礎教養科目群

全学共通科目として、大学での学習、研究のための心構えや基本的スキルを修得する科目並びに基本専門教育のための必須科目で、同時に高校での未履修者向けでもある科目として構成する。

2) 教養科目群

全学共通科目として、QOLについて考える基礎能力の育成を図り、医療福祉分野に携わる人材として、必要な周辺知識を修得し、幅広い視野と豊かな人間性をはぐくむとともに、自己並びに他者の生涯に渡る健康増進維持管理の方法や習慣を身につけ、理解する科目群である。

3) 医療福祉基礎科目群

全学共通科目とし、医療福祉関連専門職種としてのコアカリキュラムと位置付ける。医療福祉分野の基礎的、入門的あるいは総論的な科目を学科の専門性にとらわれず履修可能とし、専門職種としての基礎的知識の修得や他の専門職種の相互理解を促すための科目群であり、専門職種としての教養的科目である。そして、専門科目への導入科目群とする。

4) 専門基礎科目群

学科別の高度な専門知識、技術を学ぶための前提となる科目群である。

5) 専門専攻科目群

学科別の高度な専門的知識、技術を修得

するための科目群である。

以上のカリキュラム編成から、従来理系と考えられていた医療技術学部系の履修科目と文系と考えられていた社会福祉学部との科目群を統合し、それぞれの学部の学生が同じ科目を履修することによって、大学内から将来のチーム医療、福祉、保健に関して他の職種の内容を理解し、チームワークが出来る学生を育成する方針を設定した。

2. 基礎ゼミとアドバイザー

少人数教育を目標とし、1グループ7ないし10名の学生に対して、全学の教員が出動する原則で、アドバイザー制度を採用した。前期セメスターの基礎ゼミ I において、各学科の教員をアドバイザーとして、その学科の学生はコミュニケーションスキル、すなわち読み、書く、話す、聞くとの日本語技法の習熟が出来るように設定した。後期セメスターにおいてはアドバイザー 1 人にたいして、5 学科の学生がチームになり、それらの学生間で連携して共通の問題を討論、解決し、レポートを書くという基礎ゼミ II を設定した。すなわち1年次から医療福祉職のチームアプローチの基盤作成を開始した。

V. おわりに

このように開学した本学からの学生が将来卒業後、新潟地域のみならず、全国に発展し、少子超高齢社会へと変化していくわが国の医療福祉保健分野において、障害者、高齢者、対象者の「生活の質」すなわち Quality of Life が豊かになることを主体的にそしてチームの一員として支援するようになることを期待したい。

平成13年12月吉日